

厚労科研大西班

「患者・医療者アンケート調査」報告

2026 年 3 月 16 日

研究分担者 小宮山貴史、齋藤正英

研究協力者 谷謙甫、若尾直子

回答者属性

性別

医療従事者 男性 70%、女性 28%

患者 男性 64%、女性 32%

- ・ いずれも男性が女性の 2 倍程度と偏りがあった。
- ・ 医療従事者と患者との間では大きな違いはなかった

年齢層

医療従事者 40 代が 36%で最多（30 代から 50 代で 83%）

患者 70 代が 39%で最多（60 代から 70 代で 67%）

- ・ 医療従事者と比較して患者は高年齢層が多かった。

地方区分

医療従事者 関東 30%、中部 26%、他は 10%前後

患者 中部 60%、関東 17%、他は数%ずつ

- ・ 患者は中部が 6 割と大きな偏りがあった。

医療従事者と患者との意識のちがいについて

1. 放射線治療に関わる医療者や機器はどのように配置されるのが望ましいか

全体

- ・ 医療従事者、患者ともに「都道府県内の複数の中核病院に集約する」が最多
- ・ 医療従事者、患者間に大きな乖離なし。

性別での検討

- ・ 男性は「都道府県内の複数の中核病院に集約する」が「各医療圏を目安に地域の病院に分散させる」の 2 倍程度であったのに対して女性は上記 2 つがほぼ同数。
- ・ 医療従事者と、患者間で大きな乖離なし。

年齢層での検討

- ・ 医療従事者、患者間に大きな乖離なし。

地域での検討

- ・東北において医療従事者、患者間に乖離が認められた。

医療従事者は「都道府県内の複数の中核病院に集約する」が最多（62%）

患者は「各医療圏を目安に地域の病院に分散させる」が最多（56%）

2. 陽子線・重粒子線治療等に関して

全体

- ・医療従事者、患者間に乖離が認められた

医療従事者は「9 区分地方に一つは必要」が最多（46%）

患者は「各都道府県に 1 つ以上」が最多（71%）

- ・性別、年齢層、地域での検討でも同様の乖離が認められた

3. 放射線治療の説明は誰から受けたいか

- ・医療従事者、患者間で若干の乖離が認められた。

いずれも「放射線科医師から」が最多であったが、患者には「主治医（外科・内科など）から説明」が 13%と比較的多かった。

- ・性別、年齢層、地域での検討でも同様の乖離が認められた

4. 放射線治療に関してどのような説明を受けたいか

- ・「治療期間中、終了後の症状」が医療従事者、患者共に最多

5. 治療方法を決めるときに最優先する項目

- ・医療従事者、患者間に乖離が認められた

- ・医療従事者は「エビデンス（ガイドラインの推奨）を優先」が最多（60%）

患者は「エビデンス」「患者の希望」「医師の意向」がほぼ同数（それぞれ 30%前後）

- ・性別、年代層、地域別でも同様の乖離あり。

6. 通院に 2 時間程度かかる放射線治療施設で平日に 2 か月程度毎日治療を受けるとしたらどのように治療したいか

- ・医療従事者、患者間で若干の乖離が認められた。

- ・医療従事者、患者共に「入院」が最多（45%前後）であった

- ・患者は「自宅から通院する」の回答が 34%と医療従事者の 22%にくらべて多かった。

- ・性別、年齢層、地域でも検討でも同様の乖離が認められた。

7. 放射線治療に関する情報は患者に十分行き届いているか

- ・医療従事者、患者間に乖離が認められた

- ・医療従事者よりも患者の方が「十分行き届いている」との回答が多かった

- ・性別、年代層でも同様の乖離あり

- ・地域の検討では東北で特に大きな乖離が認められた。「十分行き届いている」の割合について医療従事者が6%と低かったのに対して患者は56%と高かった。

8. 今後の放射線治療に期待することはなにか

- ・医療従事者、患者間に乖離が認められた
- ・医療従事者は「治療回数を減らすための工夫」が最多（54%）であったのに対して患者は「腫瘍細胞を死滅させることを優先した治療機器の開発」の回答が最多（71%）であった。
- ・性別、年齢層、地域でも検討でも同様の乖離が認められた。

9. 放射線治療の情報を充実させる方法として期待するものは何か

- ・医療従事者、患者間に大きな乖離は認められなかった。
- ・マスメディア、インターネット、病院内のがん相談が多い
- ・医療従事者は「テレビ、新聞等のマスメディア」が最多、患者は「病院内のがん相談の充実」が最多であった。

小括

集約化と均てん化について

・医療者、患者共に「原則集約化」という点で乖離はないが、粒子線治療装置の配置について医療者は集約化、患者は均てん化と大きな乖離が認められた。この傾向は性別、年齢層、地域を問わずほぼ同様に認められた。

治療方針決定の際の最優先項目について

・医療者は「エビデンス」がほとんどするのに対して、患者は「エビデンス、患者の希望、医師の意向」がほぼ同数と乖離が認められた。患者はEBMだけでなくSDMをより重要視していると考えられた。

今後の放射線治療に期待するもの

・医療者は治療期間を短くすること、患者は腫瘍細胞を死滅させることを優先した治療機器の開発と乖離が認められた。この傾向は性別、年齢層、地域を問わずほぼ同様に認められた。

まとめ

「粒子線施設に配置」、「治療方法決定の際の優先項目」、「放射線治療の情報の充実度」、「今後の放射線治療に期待するもの」について医療従事者と患者との意識に乖離が認められた。一方、集約化と均てん化については医療従事者、患者共に集約化の回答が多く乖離はみられなかった。ただ、粒子線施設の配置と合わせて考えると患者の意識として「都道府県単位で

の医療の均てん化（都道府県内では集約化しつつも、都道府県ごとは差がないようにしたい）」が考えられた。それに対して医療従事者は都道府県内だけでなく、地域を含めた集約化を意識している点で両者の考え方には乖離があるともいえる。

医療従事者と患者との意識の間に少なからず乖離があることが分かったことから、医療従事者による検討のみでなく、患者の意見を取り入れた政策検討が求められる。本研究結果は日本放射線腫瘍学会ホームページに掲載し、医療従事者、患者などに広く公開する予定。また、今後患者の意向を把握する手段を再検討し、より多くの患者の意見を取り入れて放射線治療の提供体制を検討していくことを予定する。